

有効例と比べ、無効例では、BMI、上下顎の大きさ、舌骨の位置に差はないものの下顎の後下方への成長が認められた。顎顔面形態が、OAによる治療の、有効、無効を決定する因子になると考えられた。

7. 顎関節症における構音を考慮したスプリントの改良

熱田藤雄（千葉県循環器病センター）

前歯は切縁部、小臼歯部は最大膨隆部を目安に口蓋側を除去したスプリントを作成し良好な結果を得た。改良型は従来型と比較してサ行、タ行の改善、会話の速さ、正確さの向上と装着時間の延長が認められた。しかし耐久性特に装着時、脱着時にやや不安があったが壊れた症例はなかった。

8. 硬口蓋に発症した潰瘍形成を伴う多形性腺腫の1例

田代圭祐，花澤康雄（川鉄千葉）

症例，42歳男性。初診3年前口蓋部の小腫瘤を自覚し徐々に増大するため、初診10日前に某歯科で穿刺を受けた後平成12年4月4日当科を紹介受診。右口蓋部に30×25mm×15mm半球状、弾性硬で、径8mmの潰瘍を伴う腫瘍を認め、CTで口蓋骨の圧迫性骨吸収をみた。口蓋良性腫瘍の臨床診断の下、同年5月10日全麻下にて腫瘍切除摘出術施行。現在まで再発はない。病理組織学的診断、潰瘍を伴う良性多形性腺腫。

9. 口蓋に発生した plasmacytoid myoepithelioma の1例

原田雅弘，渋谷裕子，高橋喜久雄
（船橋中央）

近藤福男（同・病理）

口蓋に発生した plasmacytoid type の筋上皮腫の1例を経験、文献的考察を加えて報告する。患者65歳女性。主訴、口蓋部腫脹。右側口蓋部後縁に18×25mm大の境界明瞭な腫瘤を認め全麻下摘出術を施行。免疫染色所見ではs-100蛋白抗体、ビメンチン抗体さらにサイトケラチン抗体に plasmacytoid cell の陽性を示し plasmacytoid myoepithelioma の診断を得た。

10. 小児の舌に発生した平滑筋腫

加藤領子，山 満（千大）

4歳男児の舌根部正中に2年前より8×7mm大、表面は平滑な正常粘膜色を呈している、境界明瞭な弾性硬の腫瘤が認められた。疼痛はなく放置していたが症状に変化はなく経過していた。舌良性腫瘍の診断で全身

麻酔下にて腫瘍切除術を施行した。病理組織所見は楕円形の小さな核をもつ紡錘形の腫瘍細胞が索状に増殖しており、核の異型性はなく、切除断端には腫瘍細胞は認められなかった。α平滑筋アクチン抗体染色が強陽性であり、平滑筋腫と診断した。

11. 腺リンパ腫（Warthin 腫瘍）の1例

渋谷裕子，原田雅弘，高橋喜久雄
（船橋中央）

患者は60歳の男性で、1カ月前から右側頸部に腫瘤を自覚し来院。耳下腺造影、MRIおよびTcシンチにより Warthin 腫瘍と診断した。摘出後の病理組織診断では、上皮性腫瘍成分と間質のリンパ組織の量はほぼ同等で、Seifertらの亜分類で typical type と考えられた。

Warthin 腫瘍は稀なものではないが、同様に頻度が高い多形性腺腫と、MRI等の画像診断上での比較検討を行い、報告した。

12. 下顎骨に発生した悪性リンパ腫の1例

小沼桃桃，横江秀隆（千大）

患者69歳女性、右側顎下部の腫脹を主訴に来院した。CT所見では7周囲骨梁の消失がみられ、下顎骨悪性腫瘍を疑った。生検の結果、MLであった。その後、7が自然脱落し開放創になっており放射線による骨壊死及び化学療法の副作用による重症感染症を危惧し、最初に下顎骨区域切除術を行った。術後3コースのCHOP療法と放射線療法（30Gy）を施行した現在、経過は良好である。

13. 扁平上皮癌が疑われた頬粘膜原発の悪性リンパ腫の1例

中村 恵，鶴沢一弘（千大）

今回我々は比較的稀とされている、口腔内原発の悪性リンパ腫を経験したので報告した。患者、84歳男性、左頬粘膜の接触痛を主訴として来院した。慢性腎不全の透析加療中であった。X線診断にて左頬粘膜部が原発であると判定された。放射線照射療法施行し、症状消失を認めた。今症例においては慎重な経過観察が必要であると考え、予後を予測するため、発現が認められると予後不良とされている bcl-2 蛋白の発現を検討した。